「縁・えにし」のよろこび

～「秋季・彼岸会法要」（兼　仏教婦人会法座）～（2026 年９月 18 日）

今回から、「秋季・彼岸会法要」は「秋の仏教婦人会法座」との合同法座となりました。それにより、仏教婦人会の役員様がお斎（料理）をご準備くださいました。お蔭様で、多くのご参拝に御斎の場が賑やかな雰囲気になり、本堂も満堂となりました。






～「お盆の法座（盂蘭盆法要）」～（2026 年 8 月 13・14・15 日）




各日とも、午前９時よりお勤めします。15 分程度の時間ではありますが、各ご家庭のお仏壇にある、過去帳等をお持ちいただき、ご尊前にご安置してお勤めをします。お寺が一年間で一番参拝が多いのがこのお盆です。皆さま、ご先祖さまへのご恩を大切にされながらのご参拝でした。

なお、お盆を迎える前に、仏教婦人会役員の皆さま、仏教壮年会の皆さまによる清掃をしていただきました。本堂、玄関ホールの清掃、そして境内の草取り。また、高圧洗浄機を使って、山門、玄関スロープ、本堂外階段をキレイにしていただきました。ありがとうございました。

～「仏教婦人会総会／法座」～（2026 年 5 月 23 日）




真教寺には、仏教婦人会という教化団体があります。長い歴史があり、寺院活動のお支えをいただいています。名簿上の会員数は、90 名ほどです。総会は、2 年任期の役員交代の年に開催します。今後も仏教婦人会の活動においては、時代に即応しながら、いい意味で変化していく活動が出来ればと思います。

旧役員様には御礼を申し上げます。また、新役員様にはご指導をお願い申し上げます。

総会後には、お勤め。ご法話は住職がさせていただきました。

～「永代経法要」～（2026 年 4 月 21・22 日）


ご講師　安方師

ご門徒様以外にも、真教寺のホームページやＳＮＳ（Instagram・Facebook）で法要があることを知り、お参りくださる方が少しずつ増えて参りました。それをご縁にご門徒になる方もおられます。有り難い事です。

ご講師には、安方哲爾師（大阪）をお迎えし、阿弥陀さまの大いなるお救いのご法話を賜りました。

～「春季・彼岸会法要」～（2026 年 3 月 16 日）


ご講師　花田師

やわらかな春の陽ざしの中、多くのご参拝をいただきました。ご講師には、花田照夫師（嘉穂郡桂川町）をお迎えし、阿弥陀さまのお慈悲いっぱいのご法話を賜りました。やはり、お説教お聴聞は楽しみですね。

阿弥陀さまからのお手紙

『報恩講』

葛野洋明（龍谷大学教授　大阪府池田市・託明寺）

報恩講は、親鸞聖人のご命日を縁として、御恩に報いるお仏事です。親鸞聖人は阿弥陀さまのお救いをよろこばれ、その生涯を心豊かに生きて、大いなる安らぎのなかにいのちを終えていかれました。

親鸞聖人の三十三回忌に『報恩講私記』が著され、「報じても報ずべきは大悲の仏恩」とお敬いの心をもって報恩講が勤められるようになりました。親鸞聖人が仰いで止まなかった阿弥陀さまの大きな慈悲のお救いを改めてお聞かせいただき、親鸞聖人と同じように阿弥陀さまのお救いに支えられて、豊かな心と安らぎの思いを新たにさせていただくのです。阿弥陀さまのお救いを聞きよろこび、仏徳を讃嘆させていただくことこそ、まさしく「大悲の仏恩」を報ずる報恩講です。

親鸞聖人のご往生の場面は、親鸞聖人の曾孫で、後に本願寺第三代宗主となられた覚如上人によって伝えられています。覚如上人は親鸞聖人ご往生の八年後にお生まれですから、曾祖父である親鸞聖人に直接お会いすることはありませんでした。当時は、親鸞聖人に直接お会いになったご門弟の方々がいらっしゃって、聖人のご命日には、お墓にお参りされたことでしょう。長老となられたご門弟方が、覚如上人にありし日の親鸞聖人のお言葉や出来事をお伝えくださったこともあったでしょう。

覚如上人は「直接の曾孫である私でさえ、曾祖父の親鸞聖人が語られたお言葉や、さまざまな出来事を知ることができていない。これから後世の方々はなってしまう」と、大きな危惧を抱かれたにちがいありません。なんとしても、親鸞聖人のご生涯、そして顕らかにしてくださった阿弥陀さまのお救いを伝えなければならないと、親鸞聖人のご生涯を絵と言葉で綴った『本願寺聖人親鸞伝絵』をご制作くださいました。

他宗の高僧とよばれるお徳の高い僧侶の生涯を絵で伝える時、その方のご臨終の場面が大きく描かれ、仏さまのお迎えや奇瑞と呼ばれる不思議なしるしが描かれ、仏さまのお迎えや奇瑞と呼ばれる不思議なしるしが描かれるのが通例でした。しかし、親鸞聖人のご往生の場面は、淡々とご臨終のご様子が述べられているばかりです。仏さまのお迎えや奇瑞とよばれる不思議なことが何も描かれていないことで、後世の者が親鸞聖人のご往生の場面を振り返った時に、浄土真宗のとても大事なことを、顕らかに受け取ることができます。それは、阿弥陀さまのお救いは、臨終において特別なことを何も期待する必要がなく、臨終の善悪を一切問わないということです。

親鸞聖人のご往生のその時には、ご門弟が数名と末娘の覚信尼さまが看取りになりました。親鸞聖人が十一月の下旬から横になられて、二十八日（旧暦の十一月の二十八日、新暦は一月十六日）にご往生されます。その間の様子は、そばにいらっしゃった覚信尼さまからお聞きになったのでしょう。伝絵に克明に描かれています。

ただただ阿弥陀さまの尊いお救い、そのご恩を述べられて、お念仏が続いていたことが示されていますす。そして「念仏の息」が絶え絶え終わられたと伝えられています。

いのちを終えられたことを「念仏の息」が絶え終わったと示されているのは、単に口に出ていたお念仏の声が止まったというだけではないのでしょう。親鸞聖人のいのちは、「南無阿弥陀仏」という阿弥陀さまのお救い「大悲の仏恩」によって支えられていたことが表わされていたように思えてなりません。

親鸞聖人の生涯、いまその全てを振り返ることはできませんが、波瀾万丈などという言葉では言い表せないほど、想像を絶する出来事ばかりでした。しかし、阿弥陀さまのお救いに出遇うことができた親鸞聖人は、生涯のどの場面もどのご縁も、すべて阿弥陀さまのお救いに支えられての日暮らしでした。いのち終えるその時も、阿弥陀さまですが、「南無せよ、阿弥陀仏に。おまかせなさい、必ず救うこの阿弥陀仏に」と「南無阿弥陀仏」となって至り届いてくださっていました。そのお救いをよろこび、安心のなかで生き、いのちを終えていかれました。そのことを「念仏の息」という一言によって、後世の私たちに語り伝えてくださったのではないでしょうか。

今年も報恩講のご縁をいただきました。阿弥陀さまの「南無阿弥陀仏」のお救いは、いまこの私に至り届いてくださっています。阿弥陀さまのお救いに出遇えたからこそ、どのような人生の場面がやってきても、さまざまな思いが湧いてきても、心配はありません。親鸞聖人と同じようにお念仏に支えられて、心豊かななかで過ごすことができるのです。

この度の報恩講のご法縁、親鸞聖人が顕らかにしてくださって、仰いで止まなかった阿弥陀さまのお救い「大悲の仏恩」を改めて聞きよろこび、仏徳讃嘆させていただきます。